第15回 福山市芸術祭・築城370年記念公演

MADAMA BUTTERFLY

オペラ〈蝶々夫人〉

ジャコモ・プッチーニ作曲

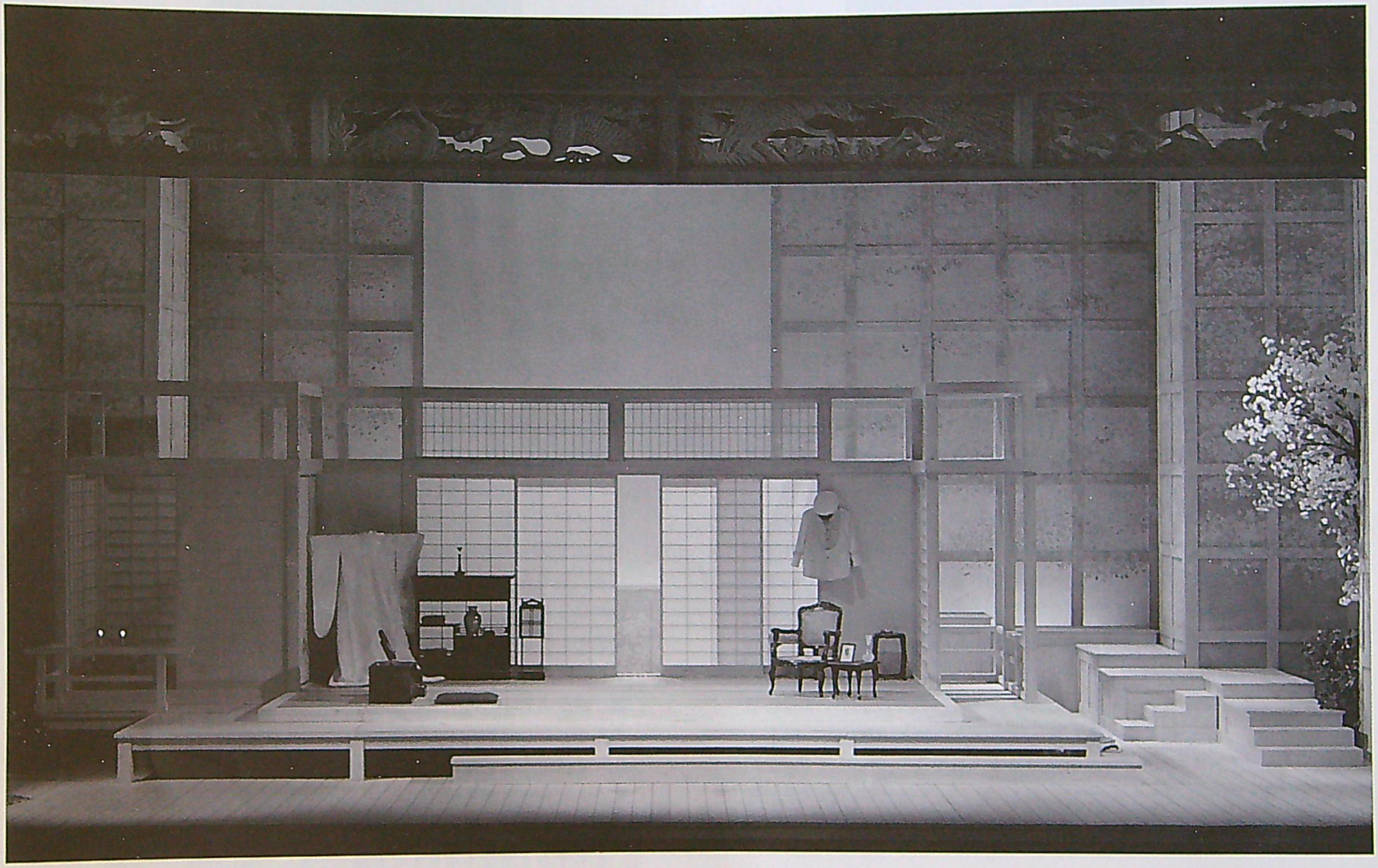
1992 9／5(土) PM6：30　9／6(日) PM2：00

福山市民会館大ホール

主　催／オペラ「蝶々夫人」福山公演実行委員会

共　催／築城370年記念事業実行委員会・福山市教育委員会・福山文化連盟

後　援／広島県教育委員会・中国放送



福　山　市　長
三　好　　章

御　挨　拶

第15回福山市芸術祭公演オペラ「蝶々夫人」が、盛大に開催されますことを心からお慶び申し上げます。

イタリア・オペラの代表作の一つとして世界中で愛されている「蝶々夫人」が、福山の人達の手により本格的なオペラ公演として実施されますことは、地域文化の発展に大きく寄与していただけるものと確信するものであります。

本市におきましては、現在建設中の（仮称）福山文化ホールをはじめ、各種文化施設が着々と整備されつつあり、ハード面での整備は進んでおります。しかしながら、ソフト面での充実はこれからの課題であり、こうした機会にオペラ「蝶々夫人」が開催されますことは誠に意義深いものであります。

本公演を契機として、オペラ活動の活性化が図られますようご期待申し上げますとともに、関係者の皆様のより一層のご活躍をお祈り申し上げまして、ご挨拶といたします。

福山文化連盟会長
藤　井　軍三郎

お祝いのことば

この度第15回福山市芸術祭の行事としてオペラ「蝶々夫人」が公演されます。しかもこの有名な「蝶々夫人」が地元声楽家日高好一氏を中心とするキャストによって演ぜられるということは、私たちの最も欣快とし、誇りとするところであります。

我が郷土福山地方は、最近続々と文化施設が出現しはじめました。これは文化を愛し、文化向上を念願するわれわれにとって、この上もなく嬉しいことであります。併しこの次々に実現する文化施設を如何に有効に生きて働かすかということが、我々に課せられた最大の課題ではないでしょうか。それは壁面芸術にしろ、舞台芸術にしろ、どの様にして更に高次の芸術を発表し、真実の鑑賞をするか、このことに意を注ぎたいと思います。この意味において、この度のオペラ「蝶々夫人」の公演は、待望久しかっただけに意義深いものがあると存じます。この際更に欲を云わしてもらうならば、音楽面に於ける指揮者、オーケストラ等も地元でという願いはどんなものでしょうか。私たちは一日も早くその様な形態による公演が実現することを念願してやみません。

ともすると文化不毛をかこち勝ちであった福山地方は、今回のこの壮挙によって、いよいよ前途洋々たるものが見えはじめました。これは何ものにもかえられぬ喜びであります。

一人でも多くの鑑賞者を得て、大盛会裡に終了することを祈念してお祝いのことばと致します。

福山市教育長

池　口　義　人

お祝いのことば

風の音や雲の流れ、かすかな秋の気配を感じる好季節を迎え、第15回福山市芸術祭が盛大に開催されますことを心からお慶び申し上げます。

福山市芸術祭は、広く市民の方々に優れた芸術作品を鑑賞する機会を提供すると共に、芸術家の方々にも舞台芸術の創造と発展を図る祭典として親しまれてまいりました。

今回は地方において鑑賞する機会の少ないオペラに取り組まれ、しかも福山の人達の手による初めての公演ということで、大変意義深いものと考えます。

申すまでもなく、オペラは高度な音楽作品として作曲され、歌唱も管弦楽もバレーも最高水準のものが要求され、それらが一体となって素晴らしい舞台になります。

出演されます皆様は、精力的に練習を積み重ねておられるだけに、その成果が十二分に発揮されるものと期待しております。

本公演を契機といたしまして、地元主体のオペラ公演が実施できる基盤となり、継続的に開催されますことを切望いたしますと同時に、音楽に対する理解がより一層深まりますことを祈念して、お祝いのことばといたします。

オペラ「蝶々夫人」福山公演実行委員会委員長

鍋　島　喜八郎

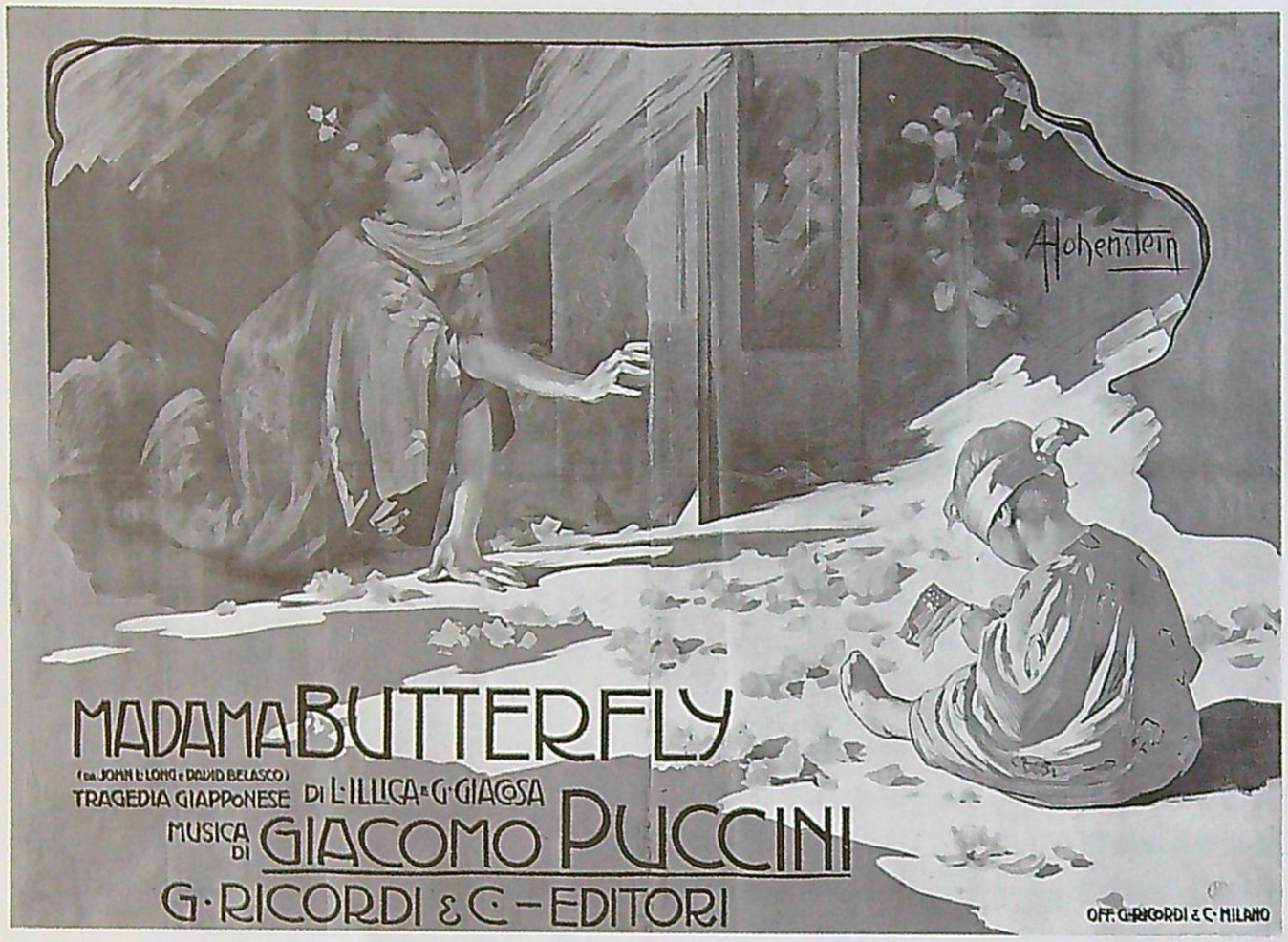
御　挨　拶

本日は、第15回福山市芸術祭公演及び築城370年記念公演オペラ「蝶々夫人」に御来場いただき、主催者一同、心より御礼申し上げます。

此度の上演に際しましては、市教育委員会・県教育委員会・福山文化連盟関係各方面の皆様方をはじめ、景気の先行が懸念されます中、広告協賛いただきました百数十社の地元企業の皆様方には、御厚情に対し幾重にも感謝を申し上げます。

文化の育たぬ町に繁栄はなく、又、魅力のない町に若者は帰らない……等、言われますが、本日出演されます音楽家の方々とそれを支えます地元の力とが結集されて、本公演を上演できますことは、大変意義深く素晴らしい力（パワー）を痛感致しております。

今回の公演に出演の皆様、それを支えて下さった企業・法人の各位、そして何よりも本日会場に足を運んで下さいました皆様方に、もう一度心より御礼を申し上げますと共に、力作「蝶々夫人」の舞台を最後までごゆっくりとご鑑賞下さいます様、お願い申し上げます。



蝶々夫人

作曲／ジャコモ・プッチーニ

台本／ルイージ・イルリカ／ジュゼッペ・ジャコーザ

指揮／牧村　邦彦

演出・訳詞／平尾　力哉

〈キャスト〉

	5日(土)	6日(日)
・蝶々夫人	山脇　恵子	日越喜美香
・すずき	黒川　泉	藤井　美雪
・ケート	康広美千子	康広美千子
・ピンカートン	日高　好一	日高　好一
・シャープレス	米田　哲二	米田　哲二
・五郎	藤本　政志	藤本　政志
・山鳥居	秋山　啓	秋山　啓
・僧侶	長船　伸夫	長船　伸夫
・神官	柳井　博文	柳井　博文

・母……掛谷　佳子
・叔母……谷中加代子
・薬師手（叔父）……川西　顕
・従妹……橋本　史
・役人……広江　正教
・憂（子役）……井上　和美
・舞妓……金光　直子
清水　明美
清水　澄代
鈴木　恒美
高橋　美紀
土井　範江
富山　育美
成本　直美
原　久美子
廣嶋　晶子
深坂友美子
藤井　久子
矢羽々由佳
・親戚……池田　進一
石山　登
斉藤　仁
佐方　光
本多　正夫
・親戚・長持担ぎ…河野　道之
・日出吉・車夫……三甲野和史
・香助・書生……土屋　正義
・米国水兵……佐々木智彦
永滝　史明
・巫女……小畠　和子
三宅　由里
・菅弦楽……倉敷管弦楽団

〈スタッフ〉

・副指揮……清水　史広
・演出助手……豊田　千晶
・美術……和田　平介
・照明……中山　安孝
・舞台監督……幸泉　浩司
・衣裳……渡辺　園子
・メイク……田中　尚美
・監修……林　忠敬
・制作……福山オペラ協会
・制作協力……㈱クリエーション
・舞台製作……大塚舞台
・衣裳……㈱東京衣裳
・床山……丸善かつら
・小道具……藤浪小道具
・照明操作……篠本照明
・舞台庭木製作……光枝　啓子

（楽譜はトヨタミュージックライブラリーより借用）

旗上げ公演の《蝶々夫人》

平　尾　力　哉

僕の父方の祖母は「てう」と言った。これで「ちょう」と読む。生まれたのは明治13年、祖父二代目平尾賛平に嫁いだのは16歳のときと聞いているから、明治28年のことであったのだろう。当時のことであるからもちろん数え年で、満年齢では15歳で結婚したことになる。オペラ「蝶々夫人」のモデルとなった事件の起きたのは明治27、8年（1894、5年）、日清戦争のころと言われているから、つまり祖母はほぼ蝶々さんと同時期に、しかも殆ど同年令で結婚生活を始めたことになる。もっともその後祖母は六男三女を得て、86歳の天寿を全うしたから、蝶々さんとはかけ離れた人生を送った訳だ。

僕の母戸沢妙子が父平尾貴四男に嫁したとき、懐剣を携えてきた。それは江戸時代初期の『和泉守兼重』の銘がある、刃渡り七寸六分、平作りの短刀であった。この懐剣は僕が譲り受け、現在手元に持っている。もし結婚生活が不調に終わったときは、生きて実家の敷居をまたがないと言う武士階級の倫理を守るために、現在でも花嫁姿では形だけの懐剣を帯にはさむが、僕の母の場合は真剣を持って嫁入りした訳である。幸い母はそれを実際に使う機会のないまま来たが、切腹の作法のことは嫁入り以前に教えられたそうである。

はじめから全くの私的な思いばかりを述べてきたが、このように「蝶々夫人」と言うオペラに取り上げられた世界は、僕たち日本人にとってはついこの間までは非常に身近な生活であったし、しかもそれを日本人の感性にぴったりとあった形でオペラ化してあるのだから、このオペラが日本で特に人気のある作品であるのは当然である。

だからこのたび福山オペラ協会が、その旗揚げ公演の演目としてこの「蝶々夫人」を選ばれたのは、この作品の性格からしてきわめて当然であり、妥当であると言える。

オペラブームと言われて久しい日本であるが、だからといってオペラを制作することが容易になった訳ではない。オペラ公演は出演者だけで成り立つものではなく、広範な関係者の協力を得る必要がある。そして何よりも、観客・聴衆の支持と応援がなければならない。今回発足する福山オペラが、この「蝶々夫人」により福山市民の理解と共感を十分に得られ、今後も定期的に公演を続けられるようになることを心より願っている。

最後に、今回上演にあたり多大な努力を惜しまれなかった――オペラ・蝶々夫人――福山公演実行委員会委員長を始めとする関係諸氏に感謝するとともに、その労を称えたいと思う。

あらすじ

■時　明治時代、およそ日清戦争のころ。
■所　長崎の山手。

〈第１幕〉

東洋的な雰囲気を感じさせる、フーガ風の短い序奏で幕があく。この旋律はこの後も再三使われる。

アメリカ海軍士官ピンカートンは、結婚周旋人の五郎の案内で、日本式の家屋を検分している。五郎は女中のすずきと、下男や料理人を紹介するが、すずきはあいさつの言葉をまくしたてる。ピンカートンの言う通り“女のおしゃべりは、どこでも同じ”である。五郎が花嫁の到着はもうすぐと言っているところに、アメリカ領事シャープレスが、長い坂を上がって息を切らせながらやって来る。飲み物の用意を命じたピンカートンは、“この家を999年借りたが、契約はいつでも取り消せる”と得意がり、《どこであろうとヤンキー精神で》と、港々を旅してまわるヤンキー気質をうたう。領事に飲み物をすすめた彼は、“恋よ、女よ”とうたい継ぐが、領事は“浮気な若者”と彼をたしなめ、二人は《アメリカ・フォーエバー》と英語で乾杯する。ここでは、〈アメリカ国家〉や〈ヘイル・コロンビア〉の断片が使われている。

領事が“花嫁はきれいか”とたずねると、五郎が顔を出し“あなたにも、お望みならばお世話しましょう”と言って、ピンカートンに追い払われる。ここに表れる旋律が、この後も五郎の登場のたびに聞かれる。

花嫁に対する気持ちをただされたピンカートンは、“どこまで本気なのか、自分でもわからない”と無責任なことを言い、《まことの愛と言えるか》と、可憐な姿に心をひかれたのだとうたう。領事は“清らかな愛を裏切らないように”と忠告するのだが彼はとり合わず、あげくには“いつかアメリカの花嫁をむかえる日のために”と杯をあげ、恥じる様子もない。

まもなく、五郎が花嫁一行の到着を知らせ、管楽器には長唄の〈元禄花見踊り〉の一節が聞こえる。女友達といっしょに登場した蝶々さんは《喜びにあふれ…》と今日のうれしさをうたう。

ピンカートンに話しかけられた彼女は、〈越後獅子〉の旋律にのせて、家が落ちぶれて芸者に身を落とした身の上話をし、友達もそれは本当のことだと、あいづちをうつ。

〈君が代〉の断片が聞こえるうちに、蝶々さんの親類や、登記役人、神官が登場する。ピンカートンは一同にあいさつし、蝶々さんに“愛の巣だよ”と家をさす。彼女も持ち物をいろいろ取り出して彼に見せるが、このときは、〈さくらさくら〉が伴奏に聞こえる。持ち物の一つの短刀は、彼女の父が天皇から賜ったもので、それで切腹したのだと五郎がピンカートンにささやく。彼女は仏像を取り出し、ご先祖の像だと告げるが、それから小さくピンカートンに、《夕べ教会にたった１人で…》と昨日ひそかに教会に行ってキリスト教に改宗したことを打ち明ける。《あなたと共に神の御前で…》。ここでの主要旋律が運命の旋律で、この後もたくみに使われる。

まもなく〈お江戸日本橋〉の旋律も聞こえる中、結婚式がとり行われる。友達の“マダム・バタフライ”という呼びかけに、蝶々さんは“マダム・ピンカートンよ”と誇りをこめて答える。シャープレスと役人が連れだって退場し、人々が祝いの酒をくみかわしている所へ、花嫁の伯父の僧侶が突然現われ、彼女が異国の教えに改宗したことを怒り、のろいの言葉をあびせる。ここで管楽器で奏されるのろいの動機はこの後も何回か現れる。僧侶は“勘当だ”と言い捨て、人々をうながして荒々しく退場する。

舞台には涙にくれる蝶々さんとピンカートンだけが残り、彼はやさしくなぐさめの言葉をかける。この時家の中から聞こえるすずきのお祈りも効果的である。夕やみが迫り、変化に富んだ甘美で官能的な愛の二重唱がはじまる。途中で蝶々さんは夜の衣装に着替え、二人はよりそい、やがて相いだいて星のかがやく夜の美しさをたたえ、愛の喜びを謳歌する。やがて、運命の旋律と共に二人は静かに家に入り、短い後奏のうちに、幕となる。

〈第２幕第１場〉

前の幕から３年の月日がたったある日の午後の蝶々さんの家。のろいの動機をふくむ短い前奏で幕が上がると、女中のすずきが〈高い山から谷底見れば〉の旋律で、神々に蝶々さんの悲しみを除きたまえと祈っている。その後二人の間で、ピンカートンの残していったお金がわずかになったことが話題になる。すずきは“外国のだんなが本国に帰ったら、二度と戻らないものだ”と言うが、ピンカートンの“駒鳥がひなを抱くころに私も帰ってくる”という言葉を信じ続ける蝶々さんは、はじめはすずきを強く叱りつけ、その後は静かに彼は必ず帰ってくるとさとして、このオペラを代表する有名なアリア〈ある晴れた日に〉をうたう。“ある晴れた日、港にあの人の乗った船がはいる。あの人は、私の待つ丘を目ざして坂道を上がり、きっと昔どおりかわいい妻と呼ぶでしょう”という真情にあふれた美しいうたで、プッチーニの数多い名歌中でも、もっとも良く知られたものの一つである。この中で蝶々さんが“うれしさのあまり死ぬかもしれない”とうたう一節の、死という言葉のところで管弦楽は最強音で主題をかなでるが、これは蝶々さんの悲しい運命を暗示しているようにも思われる。

アリアが終わると、周旋の動機がひびいてシャープレスと五郎が蝶々さんをたずねてくる。領事を迎えて蝶々さんは喜びに、なにくれとなく世話をやく。領事がピンカートンの手紙を持ってきたと伝えるときに使われる〈宮さん、宮さん〉の旋律は、再婚に関連してこのあとにも何度も現れる。

ピンカートンからの手紙だと聞いただけで大喜びした蝶々さんは、はしゃいでしゃべりたて、シャープレスに“アメリカの駒鳥はいつ巣をつくるのですか”と質問するので、立ち聞きしていた五郎は思わず笑い出してしまう。そこへ金持ちの山鳥居公が〈宮さん〉の旋律につれて軽い小太鼓の音と共に登場する。山鳥居公は五郎の仲介で蝶々さんを妻に迎えようと思っているのだが、彼女は“私は夫のある身”とまったく相手にしない。実はピンカートンからの手紙は、彼がアメリカ婦人と正式に結婚したという知らせなのだが、この様子を見たシャープレスはどうに

も言い出すことが出来なくなってしまう。五郎は山鳥居公といっしょになれば何でも望みしだいと蝶々さんを口説くが、彼女はにべもなくはねつけるので山鳥居公もとうとうあきらめて〈宮さん〉の旋律にのって帰ってしまう。

邪魔者がいなくなったこの機会にと、シャープレスは周旋の動機に続いて手紙を取り出し、蝶々さんとの手紙の二重唱《それではこちらへ》が始まる。管楽器や弦の独奏が憂いをこめた旋律を奏し、弦のピッチカートがはずむように響く美しい二重唱で、領事の言葉に一喜一憂する蝶々さんの純情な気持ちと、それを見るにつけて手紙をそのまま読む気になれず悩むシャープレスの気持ちがみごとに描かれている。この美しい旋律は、この場の最後のハミング・コーラスにも再現される。

手紙を一節ずつ読み進み、ひたすらにピンカートンを信じている蝶々さんを前にして、シャープレスは彼女に真実を告げることの残酷さに決心がつかず、今更にピンカートンの無神経さに怒りを覚える。だがついに、途中で“もし彼が帰らなかったら”と尋ねると、大太鼓の一打とともに曲調が変わり、蝶々さんはがっくりと“道は二つ、芸者にもどるか、死ぬか…”とつぶやく。領事が思い切って“山鳥居公の申し出を受けられては…”と言うと彼女は“あなたまでが”と怒りだし、“領事さんのお帰りよ”と思わず叫ぶ。しかし、すぐ失礼を詫びるが、あまりの悲しみに思わずよろめく。

気をとりなおした蝶々さんは奥にかけこみ、管弦楽が愛の主題をかなでそれが〈かっぽれ〉の豊年ぶしの旋律に変わるうちに、子供を抱いてもどってくる。彼女は領事に誇らしげに子供を見せ、ピンカートンが発ってから生まれたのだと話す。そして“彼に知らせてほしい、この子が待っていると…”と頼む。ここで〈豊年ぶし〉の旋律がゆるく悲しげに現れ、彼女は《母様に、お前を抱いて…》と、子供にむかって芸者にもどるつらさを涙ながらにうたい、生きてそんなはずかしめをうけるくらいなら、いっそ死んだほうがましだとつぶやく。この部分は〈推量節〉にもとづいているが、ここの動機は最後に彼女が子供の幸福を祈りながら死ぬところで管弦楽に現れる。

蝶々さんは、領事の質問に答えて“子供の名前は今はウレイだが、お父様が帰ればヨロコビになる”と言うが、その言葉にかぶせて〈ある晴れた日に〉の旋律が聞かれる。

重い心をいだいて領事が退場したあとに、すずきが五郎を引きずってきて、この男が「坊やは父なし子だ」とふれ歩いていると言う。蝶々さんは怒って、短刀を持って彼を追い返すが、そこへ港から船が入ったことを知らせる砲声が鳴りひびく。

蝶々さんが望遠鏡で港を眺めると、そこには確かに彼の乗艦アブラハム・リンカーン号の姿。管弦楽は〈ある晴れた日に〉と〈星条旗〉の旋律、そして愛の主題をかなでるが、蝶々さんは待ちに待った日がやってきた喜びに涙を流し、すずきと共に花の二重唱〈桜の枝をゆすぶって〉で、庭の花をつんで部屋一面にまき、歓迎の準備をする。やがて蝶々さんは結婚式のときの衣装をまとい、子供にも化粧をして、障子の間から外をのぞいてじっと彼の帰りを待つ。夜が迫り、三人の姿が影絵のように浮き上がる。静かなヴァイオリンの独奏と共によく知られたハミング・コーラスが聞こえてくる。すずきと子供は眠りにつき、蝶々さんひとりがじっと外を見守るうちに静かに幕がおりる。

〈第２幕第２場〉

悲しい想いをたたえた、異国的なゆるやかな間奏曲が終わると共に幕が上がる。場面は第１場と同じ蝶々さんの家。すでに夜も明けそめている。遠くから水夫たちの合唱が聞こえる。目を覚ましたすずきは、夜もすがら夫の帰りを待ち続けた蝶々さんに休息をすすめ、彼女は〈豊年ぶし〉のゆるやかな旋律と共に《ねんねころりねんころり》と口ずさみ子供といっしょに寝所に入る。

そこへピンカートンがシャープレスと共に彼女の家をおとずれ、すずきから蝶々さんが寝もやらで待ちあかしたことを知らされる。外で待っているピンカートン夫人のケートに気付いたすずきは、事情を察してあまりにむごい蝶々さんの運命を嘆く。領事は、ケートが蝶々さんの子供を引きとりたいと希望していると、すずきに協力をたのむが、最後の希望まで蝶々さんから奪うのかと、すずきはなかなか納得しない。

ピンカートンは花でかざられた部屋、そして自分の写真を見るうちに、自分のたわむれが一人の女性を不幸に沈めたことに自責の念にかられ、三人がそれぞれの気持ちをうたう三重唱となる。シャープレスは自分の忠告を聞かぬからだとピンカートンを責め、彼は心の痛みに耐えかねて《さらば愛の家》と有名なアリアをうたったあと、いたたまれずにその場を走り去る。

そこへ夫が帰ってきたものと信じて蝶々さんが入ってくるが、そこにいるケートがピンカートンの正妻と知り、一転して絶望に沈む。そしてその場の様子から全てを察し、“みんな奪ってしまうの、子供まで”と一時は放心状態になる。だが領事の言葉からようやく落ち着きを取り戻し、あの子のためならと悲しげに承諾する。しかし、その場で子どもを引き渡すことはせずに、静かだが意味ありげに“あの方ご自身にならお渡ししましょう。半刻のちにおいで下さい”と言う。

心配げなすずきも立ち去らせた彼女は、父のかたみの短刀を取り出す。そして静かに、“誇りをもって生き遂げられない者は、誇りをもって死ぬ”とその銘を読む。この場面の５小節にわたる変ロ音の伴奏は雰囲気をいちぢるしく盛り上げている。

今まさに彼女がのどを突こうとするとき、子どもが走り寄ってくる。子どもを抱きしめた彼女は劇的に、“かわいい坊や、お母さんは今死んでいくが、それはお前のため。お母さんのことを覚えていて”と悲痛な想いをこめてうたい、子どもを去らせて自らの生命を絶つ。管弦楽は子供をシャープレスに見せたときの旋律を奏し、第１幕の〈推量節〉による動機を全合奏のユニゾンで繰り返して幕となる。

登場人物の性格設定

平　尾　力　哉

身勝手な外国人男性と、一途な愛情に生きる現地妻との間の葛藤のドラマと単純化してしまえば、「蝶々夫人」の悲劇はいつの時代でも、どこの国でも起こりうるものであると言える。

しかし、オペラ「蝶々夫人」には、明らかにそういった一般化を拒むものがある。「蝶々夫人」を「蝶々夫人」たらしめているのは、「蝶々さん」の生きざま、そして殊にその死に現れている彼女の性格そのものである。

「蝶々夫人」の先駆的作品である、小説「お菊さん（マダム・クリザンテーム）」の結末と比較する時、それは一層はっきりしてくる。

フランスの小説家ピエール・ロティの作品である「お菊さん」では、フランス軍士官の現地妻となった芸者の「お菊さん」は、愛らしい性格と可愛らしい仕種で、そのフランス士官を魅了する。いよいよ帰国しなければならなくなった時、心を痛めながらも彼は「お菊さん」に手切れ金を与え、去って行く。しかし外に出てからふと胸騒ぎを覚え、妾宅にとってかえした士官は、そっと二階の「お菊さん」の様子をうかがう。すると二階から「チャリン、チャリン」という音が聞こえてくる。二階を覗いた彼がそこに見たのは、さっき与えた金貨を楽しそうに数えている「お菊さん」の姿であった。

この「お菊さん」の笑いの意味は様々に解釈ができ、心理的にもドラマ的にも興味深いが、自ら死を選択することにより全世界の人々の同情と共感を得た「蝶々夫人」には、劇的インパクトの上で決定的に劣る。

であるから、何故「蝶々さん」は死なねばならなかったかということを心理的に明らかにすることが、このドラマの構造の根底を舞台上で表現する上で重要なポイントとなってくるといえる。

それぞれの性格に従って必然的な行動をとる各登場人物の織りなすその関係のダイナミズムの中で、このドラマが悲喜劇的結果に致らざるを得なくなる訳だが、そのリアリティを、各出演者は歌唱演技により舞台上で創造し、表現するように務めなければならない。

以下、台本に即して登場順に、主要な登場人物の性格設定を述べてみよう。

尚、日本人の役名は慣用とは異なり、カタカナ表示を用いずに、できるだけ日本人名として不自然ではないと思われる漢字名を当てた。

☆五郎

職業は、原語で nakodo（ナコード）とされているが、それは我々のイメージする仲人（正式な結婚のための）ではなく、外国人や金持に現地妻を斡旋する取り持ち役を意味する。

年齢は30代半ば。花街をうろつく芸人崩れの幇間。一寸見は大変愛想がいい。が、相手が金を持っていると思えば、露骨に媚び諂い、ひとたび相手が没落したと見るや、手の平を返したように威丈高につけこんでくるという、小悪人の典型。その点を見抜かれて軽蔑されても、恬として恥じるところをしらないが、摑んでいる客筋から、それなりに商売は上手いのであろう。

☆F.B. ピンカートン

米国海軍中尉。25才位か。「港々に女あり」という言葉を地で行く、プレイボーイ。

綺麗な花は手折られるためにあると信じきっており、蝶々さんとの「結婚」は初めから遊びである。本当の結婚はアメリカ人とすることに決めており、彼女を愛するのも外面的な美しさ可愛さ故である。彼女の人間性に興味を抱き、暖かな愛情を持つシャープレスとは対照的である。白人として日本人に優越感を感じ、世の中に恐いものなしという稚さを持ち、行状をたしなめるシャープレスにすら、「年寄りは心配しすぎる」という程、若さゆえの無神経さと傲慢さを持つ、軽薄な人間である。

しかし、蝶々さんが一目惚れするだけの魅力の持主でなくてはならない。

☆シャープレス

長崎駐在の米国領事。40代後半。

アメリカ人でありながら、職業外交官としての仕事柄か、年令のためか、或は元々の性格がそうであったのか、柔らかな物腰と暖かい性格の持主。蝶々さんの真摯な愛情に共感を抱き、ピンカートンの態度に危険なものを見るが、最終的には米国領事としてピンカートン夫婦の側に立つ。

長年の日本滞在の内に、日本の風俗習慣にも理解を示し、家に入る時には靴を脱ぐだけの繊細さも身につけている。

アメリカ人の良心の代表ともいえる。

☆すずき

鈴木という姓を考えると奇妙であるが、「寿々木」というような源氏名と考えれば納得がいく。元々は色街においての蝶々さんの少し年上の朋輩であったろう。年は20代半ば。女中となった現在も、水商売上がりのほのかな色気が、そこはかとなく感じられる時がある。

蝶々さんよりも多少は世の中を知っており、ピンカートンの帰宅を疑おうとしない蝶々さんに、歯がゆさと不憫さを感じている。

ドラマの上では、表面に現れない蝶々さんの心理の陰の部分を映し出した、鏡像としての役割を負わされている。

☆蝶々さん

蝶々さんの生い立ちに関しては、自らの口から語られる。
「私は金持ちの家に生まれましたが、没落して貧乏になったので芸者になりました。何も隠し立てしません。年は15才、もう年寄りですわ。」
言っている内容そのものよりも、彼女の態度（音楽）と、彼女の言いたがらなかった事、つまり天皇より賜った短刀と、それにより切腹した父親の死に関するエピソードに注目したい。
江戸時代、儒教道徳によって処女性が重んじられた士族の出であることを思えば、結婚の時点でピンカートンに対して芸者であったことを恥ずかしいと思っていないということは、蝶々さんが芸者という職業の性的側面について未だ無知であったと考える方が自然である。つまり、彼女は水揚げ以前の半玉のままピンカートンと「結婚」したのだ。
只一人この結婚を神聖なものと見做した蝶々さんは、ピンカートンと真に結婚するため、アメリカ人になりきる必要があると考え、それを実行した。明治時代の女性としては、ある意味で翔んでいたのかも知れない。自我を確立し、個人としての生き方を重んじるというこの考え方が、彼女を悲劇的な結末に一直線に追いこんで行くのだ。
蝶々さんとピンカートンの夢のように幸せな“幻の”新婚生活は、彼女が身籠るに足るだけは長いものの、ピンカートンがそれに気づく程の期間ではなかった事は確かだ。数ヶ月。それが幸せな憶い出の長さであろう。
ピンカートンがアメリカに帰ってから、彼の愛情を絶対に信じる蝶々さんは、毎日毎日港を見下ろす縁側に立ち続けていた。しかし、音信の全くない三年の月日は、余りにも長い年月であった。四面楚歌とも言える状況の下で、目の碧い子供を育てる蝶々さんの心の支えは、ピンカートンの愛情に対する信頼だけであった。
淋しさに泣いたことも、恋しさに身悶えした夜も、何度もあったことだろう。そして、“もしも……”という不安がふと心に萌したのも。父の形見の短刀に彫られた遺訓の「名誉ある生を遂げざるものは、名誉ある死を遂ぐべし」という言葉が、心の奥底深く浮かび上がってくることが、全くなかったであろうか。そういった無意識のストレスが、すずきのちょっとした言動に対してのヒステリックな、八つ当たり的ともいえる反応を引き起こし、また、シャープレスにピンカートンの裏切りを仄めかされた時に、即座に死を選ぶといわせるのだ。
いづれにせよ蝶々さんは、ピンカートンの不実さを信じようとはしない。「もうあきらめて山鳥居公と結婚した方が…」と勧めるシャープレスは、まるで五郎の廻し者同然と、そのときには彼女に思えるのだった。
米軍艦の入港を知らせる港からの大砲の音が、蝶々さんの勝利を告げる。それが、ケートとの新婚旅行の一環としてであるとは、一体誰が想像しえよう。蝶々さんのためにピンカートンが帰って来たと信じて、蝶々さんもすずきも、そして観客も泣くのである。
その蝶々さんの心の裡の動きは、説明する迄もないであろう。
最後に彼女は死ななければならない。彼女は、あんなになりたがっていたアメリカ人としてではなく、日本の女性に戻っての死を選ぶ。その名の通り蝶々、採集箱に閉じ込められた蝶々のように、彼女は命を絶つ。

☆山鳥居右京

日本人の姓としてはおかしな名前を持つこの大金持は、しかしながら決して喜劇的人物ではない。それどころか、今迄の女性関係を全て清算し、蝶々さんを正妻として迎えたいと、真面目に求婚しているのである。
彼の愛情が真剣でまじめなものであればある程、それを拒んでつらぬき通す、蝶々さんのピンカートンへの愛は気高く尊いものとなっていくのだ。
年令は50才位。華族としてのはなやかさと鷹揚な雰囲気を持つ。

☆ケート

年令は22～23才位。アメリカ美人。
ある種のアメリカ人の典型である。即ち、自分の善意は全ての人に幸福をもたらすと信じて疑わず、相手の都合も考えず、自分のやり方を押しつけてくるという点において。
子供を引き取りアメリカ人として育てるということは、彼女が言い出したことだろう。それが蝶々さんを決定的に死に追いやることになるとは夢にも思わずに。
蝶々さんとピンカートンの愛の家まで、何故ケートはついて来たのであろうか。彼にまかせておいては、何事も解決しないと思ったからであろうか。しかし、夫の以前の愛人の子供を引き取って養育するということは、新妻ケートにとっても大変辛い体験である筈だ。主観的、あるいはアメリカ女性としては、不甲斐ない夫に代わり、その事態に対処する立派な女性である。
おそらくピンカートンは、一生彼女に頭が上がらないことであろう。

「蝶々夫人」のこと、あれこれ

林　　忠敬

あれがいつの事であったか、ボクはもう忘れてしまったが、日高好一から『……福山地方の声楽家の総力をあげて、“蝶々夫人”を公演したい……』という彼の夢を聞いた。オペラの公演には莫大な資金を必要とする事を知っているボクは、この途方もない話を、でも地方で音楽をしている者にとっては、非常に大切な夢でもあるこの話を、ボクで力になれることがあったら使ってくれよ、と云ったことがあった。

今や、東京地方や大阪・神戸の地方の大都会では、オペラを公演することは特別なことではなく、声楽家にとっては少しオーバーに云うなら日常的ですらある。しかし、もっと地方の地方的な福山市などでは、音楽活動の中でも特別な活動と云わざるを得ないほど特別なことで、個人の力ででもオペラを公演したい、という夢は単に夢として終わらせるのでなく、これを育て実現させる方向に向かわせてこそ地方の文化は育てることが出来るのであって、日高好一の夢が、夢でなく今日の日を迎えることが出来たことを、言葉で書くことが出来ないほどの喜びをボクは今もっている。

ここまで来るには、主宰者の呼びかけに応じた出演する声楽家の個人的な犠牲――多くの練習時間、個々の負担の大きな経済的な問題など――、そしてバックで支えてやって下さった委員会の方々、福山市及び文化庁・スポンサーの方々、本当に多くの人々の力で、このオペラを公演する事が出来たことを関係した一人として感謝したい。

オペラを観たこともない人でも、「蝶々夫人」といえば、長崎が舞台になった物語だと思い、また大部分の人は“ある晴れた日に”のアリアを思い起こされるであろうほど有名なオペラであるが、この「蝶々夫人」が福山で公演されるのは、この回で三度目だと記憶している。資料を手元に置かないで書いているので定かでないが、昭和41年か42年頃、三村時計店の社長や浜島氏等の手によってなされたのが第１回目で、この時も大きな困難を克服されての公演であったと聞いている。第２回目は、この時から８年位も後であったであろうか、文化庁の移動芸術祭で、藤原歌劇団によるものであった。この日はどしゃ降りの雨であったのを憶えているから、台風の季節であったか。

今日このオペラを観て、聴いて下さる方々に、今さら主宰者の日高好一の紹介をする必要もないと思うが、彼が福山に居を定めて、もう15年位にもなるであろうか。

ボクがふた昔も前に、葦陽高校の教師をしていた時、学校の女声合唱団に一人の音楽の好きな女生徒がいた。彼女は高校卒業後に東京の音楽大学に進学し、音楽を専門とすべく学んだ。それから何年かした時、一人の男性をボクに紹介した。甘い声をした好青年であった。それが日高好一であり、その彼女は妻君である。

福山に居を定めて、関西二期会のテナーであり、名教師でもある田原祥一郎氏に師事した頃から、日高好一の音楽は大きな変貌をみせはじめた。それ以後の事は、彼のプロフィールを見ていただく事にしよう。

その他に出演されている声楽家の方々も、ボクにとってはまったくの他人ではなく、一緒に音楽した人もいるし、教えた人もいる。一介のフルーティストにすぎないボクが、こういった声楽の人々との交わりを不思議な事だと思いながら、この人達が、今日の公演にすばらしい音楽をみせてくれるものと期待している。

前書きが長くなって、本文の方を書くスペースが無くなってしまったが、プッチーニのオペラといったら、みなさんは何を思い出されるだろうか？やはり、なんと云っても今日の「蝶々夫人」であろうが、授業的な表現をすると、「ラ・ボエーム」、「トスカ」それにこの「蝶々夫人」を彼の三名作といっているけれども、彼は今から134年前に生まれた代々音楽家の家系の５代目にあたるイタリアのオペラ作曲家であるが、６才の時に父を失い、御多分にもれずの貧乏生活で、彼の勉学中の話の中には、後の名作「ラ・ボエーム」を偲ばせるような、「カバレリア・ルスティカーナ」の作曲者マスカーニとの共同生活の悲喜こもごもの貧乏生活を伝える話などある。

「蝶々夫人」は明治37年にスカラ座で初演されているから、今年で米寿を迎える作品だが、プッチーニは「マノン・ノスコー」以降すべてのオペラに、その場面の雰囲気を出すために、その舞台となる土地の音楽を使っているが、「蝶々夫人」の場合も御存知のように多くの日本の音

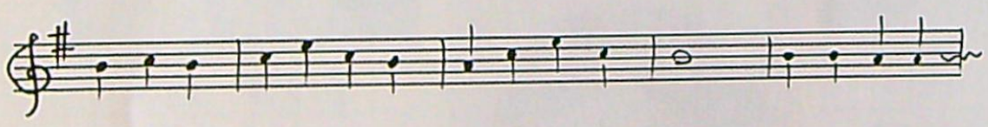
楽が使われている。この日本の音楽をどのようにして彼が手に入れたのかなどを書くと原稿枚数が増えてしまうので、代表的な日本のメロディーを楽譜にして、今日の鑑賞の一助にしてもらえるならうれしい。

最初の楽譜は、蝶々さんの登場の場でオーケストラに聞かれるもので、長唄「越後獅子」からとられている。

第一幕でアメリカの国歌とともにオーケストラに聞かれる日本の国歌「君が代」は楽譜にすることもないであろうか。

3番目は御存知の「さくら」である。

第一幕の結婚式の場面と第二幕でのシャープレスとゴローが登場する場面では、



この「お江戸日本橋」が聞かれる。

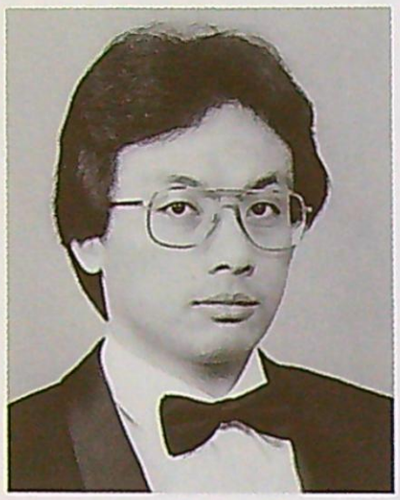
第二幕第一場では、日本最初の軍歌といわれる次のメロディーが聞かれる。「宮さん」である。

この他に使われている日本のメロディーで大切なものと思われるものに「かっぽれ」が

ある。

先にも書いたように、非常に巧みにこれらの日本のメロディーを使って舞台の雰囲気を出すことに成功していることにお気づきだと思う。この駄文の最後は、オペラ研究家の宮沢縦一氏の文章を引用して飾りたい。

「彼の歌劇は題材に万人が共感を覚える人情味豊かなものを選び、台本を慎重に練り、音楽的には独特の優美哀麗な旋律をうたわせ、歌は感情にみち、人物の描写は真実の妙を得ているが、同時に管弦楽はつねに新しい手法を効果的に取り入れ、また地方色を巧みに盛って場面に適切な色彩的雰囲気を与えている。しかも舞台に対する彼の本能ともいえる鋭い感覚は劇的効果をよく計算して、しばしば劇的な心打つ場面をあらわすことに成功している」



指揮
牧村　邦彦

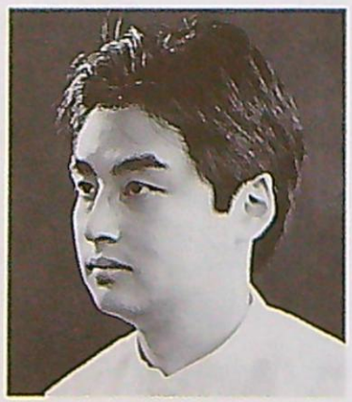
1982年、大阪芸術大学演奏学科卒業。84～86年、ウィーン国立音楽大学指揮科に留学、O. スウィットナー、T.C. ダヴィット各氏に師事。同時にバーデン市立劇場にて、G. ラグランシュ氏の下で研鑽を積む。

京都市交響楽団、関西フィルハーモニー管弦楽団等に度々客演しているが、主にオペラ指揮者としての活躍が著しく、スッペのオペレッタ「ボッカチオ」でデビュー後も、関西歌劇団、関西二期会において副指揮者として数々の公演にたずさわり、現在も大阪音楽大学オペラハウスを中心にそのレパートリーを拡げている。

喜歌劇楽友協会、神戸オペラ協会、加古川シティオペラ、京都オペラグループ、堺シティオペラ等の団体で指揮し「フィガロの結婚」「ドン・ジョバンニ」「魔笛」「コシ・ファン・トゥッテ」「カルメン」「蝶々夫人」「ヘンゼルとグレーテル」等のポピュラーな作品からメノッティ作曲の主要作品、邦人作品の関西初演など数多く手がけている。特に「こうもり」「メリー・ウィドウ」「ジプシー男爵」「乞食学生」などのウィンナーオペレッタの演奏は再演を重ね、重要なレパートリーであると同時に高い評価を得ている。大阪シンフォニカー指揮者。

演出
平尾　力哉

1947年東京に生まれる。東京大学文学部中退。
６歳より児童劇団「こまどり」に所属、ラジオ・テレビ・舞台等に出演。
のち劇作家吉永淳一氏に劇作法・舞台演出法を、オペラ演出家鈴木敬介氏にオペラ演出法を学ぶ。
藤原歌劇団、ＮＨＫイタリア歌劇団、二期会等で演出助手を務めたのち、1979年文化庁派遣在外研修員として、西ドイツ・バイエルン歌劇場に学ぶ。
現在はオペラ演出活動とともにオペラ歌手養成にも力を注いでいる。
主な演出作品
「兵士の物語」「声」「ラ・ヴェラ・コスタンツァ」
「霊媒」「泥棒とオールドミス」「アマールと三人の王様」
「泣いた赤鬼」
「椿姫」「成り行き泥棒」
「蝶々夫人」「トスカ」「ラ・ボエーム」
「ヘンゼルとグレーテル」「サロメ」
「はかない人生」「こうもり」
「ドン・ジョヴァンニ」「コシ・ファン・トゥッテ」「魔笛」
「フィガロの結婚」
「カルメン」「天国と地獄」
現在　洗足学園大学、同オペラ研究所、東京芸術大学、お茶の水女子大学、相愛大学、
沖縄県立芸術大学各非常勤講師。
二期会オペラスタジオ運営委員



副指揮
清水　史広

1988年相愛大学音楽学部卒業。指揮を尾高忠明氏、円光寺雅彦氏、酒井六雄氏に師事。
現在、コンサートやオペラ等で活躍する一方、関西二期会の副指揮者として、井上道義氏、佐藤功太郎氏、岡田司氏のアシスタントを務めている。

演出助手
豊田　千晶

1980年大阪芸術大学音楽教育学科卒業。大阪芸大、関西歌劇団、関西二期会、堺シティオペラ、神戸シティオペラ等の公演において、松山雅彦、栗國安彦、平尾力哉、松本重孝等各氏の演出作品の演出助手を務める。1987年からは大阪芸大をはじめ諸団体のオペラ公演の演出も手がける。また、研究生指導の他、〈オペラをより身近に〉という主旨で有名なオペラのハイライト版を構成し、レストランやワンフロアー会場での公演も行っている。現在、大阪芸術大学音楽教育学科勤務。

5日(土)　蝶々夫人

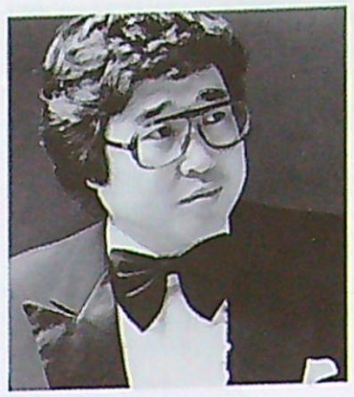
山脇　恵子

国立音楽大学声楽科卒業。故田中伸枝、田原祥一郎、日高好一の諸氏に師事。
同大学卒業演奏会出演。第７回「備後新進音楽家の夕べ」に出演。
第１回「尾道新人演奏会」に出演。オペラでは中国二期会オペラ公演にて「カルメン」のミカエラ役でデビュー。続いて「こうもり」のロザリンデ役で出演。その他喜音の会オペラ公演にて、「狐々譚」のお春役、「あまんじゃくとうりこひめ」のうりこひめ役、「魔法の笛」の侍女Ⅰ役などに出演。他二期会や喜音の会主催の演奏会に多数出演。
合唱ソロではヘンデル「メサイヤ」、ベートーヴェン「第九」、モーツァルト「レクイエム」のソリストとして出演。ジョイントリサイタル、サロンコンサート開催。　　中国二期会　会員
声楽アンサンブル「喜音の会」所属

6日(日)　蝶々夫人

日越喜美香

大分県立芸術短期大学声楽科卒業。二期会研究生20期修了。大河原光孝、中山開二、江口元子、大川宗男の諸氏に師事。
第45回毎日音楽コンクール入選。ＮＨＫ洋楽オーディション合格。
藤原歌劇団公演「後宮からの誘拐」のブロンデ役にてオペラデビュー。その後「秘密の結婚」「イル・カンピエッルロ」「魔笛」「ドン・パスクワーレ」「恋の医者」「海の子守唄」「電話」「コシ・ファン・トゥッテ」等数多くのオペラに出演。また、ＮＨＫ・ＦＭ「夕べのリサイタル」「午後のリサイタル」「音楽のおくりもの」等にも出演。'84日向市、'90延岡市、'91広島市においてリサイタルを開催。
藤原歌劇団正団員。日本演奏連盟会員。
ＮＨＫ広島文化センター講師。　　広島市在住。



ピンカートン

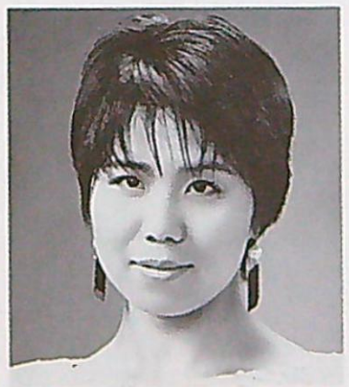
日高　好一

洗足学園大学専攻科修了。
東京二期会合唱団に在籍し数々の二期会オペラに出演。
1979年中国二期会移籍、ソロ活動を始める。
オペラでは、数多くの主役を務め、各地で演奏。
近年は、
1990年「蝶々夫人」ピンカートン役として、堺市、弘前市に。
1991年「カルメン」ホセ役として高松市に、「秘密の結婚」パオリーノ役として広島市に招かれる。
1992年、三木稔作曲、なかにし礼演出創作オペラ「ワカヒメ」出演。来年７月東京ＮＨＫホールにて再演予定。
ソロ・リサイタル10回開催。
第11回　関西日伊コンコルソ　テノール特賞受賞。
第19回　民音コンクール　　入選。
島田恒輔、三枝喜美子、田原祥一郎の諸氏に師事。
アレクサンダー・アレクセイ、アルベルト・レオーネ、レナータ・テバルディ、イタリアにてミーノ・ファネッリ諸氏のレッスンを受ける。
現在　岡山大学教育学部、中国短期大学音楽科、講師。
　　中国二期会・会員理事、日本演奏連盟・会員、
　　イタリア声楽コンコルソ審査員。
　　声楽アンサンブル喜音の会　主宰。

5日(土)　すずき

黒川　　泉

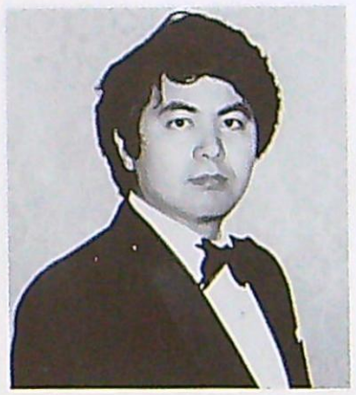
広島音楽高等学校卒業
大阪芸術大学演奏学科声楽専攻卒業
'83年より声楽アンサンブル「喜音の会」公演オペラに毎年出演
「蝶々夫人」ハイライト（蝶々さん役）「カルメン」ハイライト（カルメン役）「狐々譚」（お清役）「魔法の笛」（パミーナ役）を演ずる
備後新進演奏家の夕べ
音楽高校卒業生によるジョイント・コンサート
リサイタル開催…第１回 '87　第２回 '90
ジョイント・リサイタル（大阪）（尾道）
音楽の館主催「ニューイヤー・コンサート」（加古川）
中国二期会主催「日本歌曲の夕べ」（岡山）
　　〃　　「中田喜直の夕べ」
福山混声合唱団第20回記念演奏会において
　　ベートーヴェン・コールファンタジー
同じく第22回定期演奏会において
　　モーツァルト「戴冠ミサ」のそれぞれソリストで出演
故 南栄裕、田原祥一郎、日比啓子、日高好一の諸氏に師事
現在　中国二期会準会員
声楽アンサンブル「喜音の会」所属



6日(日)　すずき

藤井　美雪

大阪芸術大学演奏学科声楽専攻卒業。
オペラでは「修道女アンジェリカ」の公爵夫人。「フィガロの結婚」のマルチェリーナ。「カルメン」のカルメン。「こうもり」のオルロフスキー。「泥棒とオールドミス」のミストッド。「魔笛」の侍女Ⅲ等を演じる。
コンサートでは、
現代日本歌曲を歌う「二人展」
岡山交響楽団「ガラコンサート」また、
河田文忠氏作曲による「かなしいおとなのうた」を初演。
ヘンデル「メサイア」。バッハ「ロ短調ミサ」。モーツァルト「レクイエム」「戴冠ミサ」。ベートーベン「第九」等にアルトソロで出演。
日伊コンコルソ入選。霧島国際音楽祭では奨励賞を３年連続受賞。
1991年より約１年間イタリアに留学。エディス・マルテッリ、ダンテ・マッツォーラのもとで研鑽を積む。
故 松本寛子、田原祥一郎、日高好一等の諸氏に師事。
中国二期会　会員。
岡山市民合唱団「鷺羽」　ヴォイストレーナー。
神辺西中すみれコーラス　指揮者。
広島ＦＭ放送番組審議委員会　委員。



シャープレス

米田　哲二

東京芸術大学音楽学部卒業。ウィーン国立音楽大学リート・オラトリオ科卒業。関西二期会公演オペラ「魔笛」「ドン・ジョヴァンニ」「セヴィリアの理髪師」「外套」「真夏の夜の夢」「フィガロの結婚」「蝶々夫人」「魔弾の射手」「ラ・ボェーム」「タンホイザー」「椿姫」等に出演。また東京オペラプロデュースの「黄金の国」日生オペラ劇場「ヘンゼルとグレーテル」。（ウィーン留学中にはリーダーアーベント、アリアの夕べ等の他、ウィーン宮廷劇場にて「フィガロの結婚」のフィガロに出演し、絶賛を博す。また、ムジークフェラライン大ホールにて、カール・エッティ指揮で「タンホイザー」のヴォルフラムを歌う。）昨年イギリスのオールドバラ音楽祭ではブリテンの教会オペラ「カーリュー・リヴァー」のフェリーマンを歌い好評を博す。オペラの他、ベートーヴェン「第九」のバリトンソロ、ヘンデル「メサイア」バスソロ、バッハ「ヨハネ受難曲」のバスソロ等オラトリオのソリストとしても活躍中。現在相愛大学音楽学部助教授、関西二期会会員、日本シューベルト協会同人。

五郎

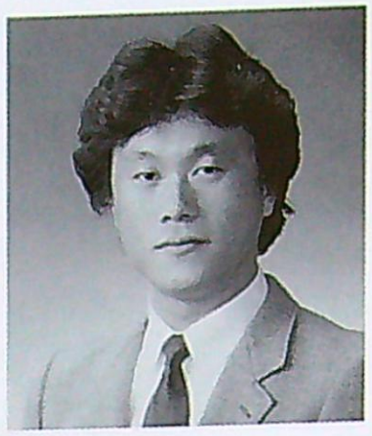
藤本　政志

国立音楽大学教育音楽学科卒業。
声楽を鈴木惇弘、日高好一の両氏に師事する。
喜音の会オペラ「魔法の笛」のモノスタトス、「地獄八景」の青鬼、中国二期会オペラ「海へ乗りゆく者」のバートレイ、「こうもり」のブリント博士、「泣いた赤鬼」の百姓、岡山シンフォニーホール開館記念オペラ「ワカヒメ」の笠臣、等にて出演する。中国二期会、喜音の会、備後新進演奏会の夕べ、楽興の会、コンツェルト・カプリチオーゾ等の演奏会に多数出演する。
また、笠岡第９演奏会等の合唱団指導にも携わる。
現在　広島県立沼南高等学校教諭
　　笠岡混声合唱団「かぶとがに」指揮者
　　声楽アンサンブル「喜音の会」所属
　　中国二期会準会員

ケート

康広美千子

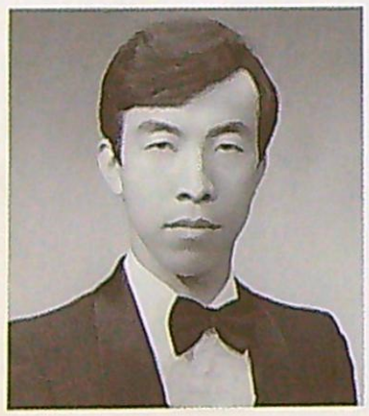
中国短期大学音楽科卒業。
東京学芸大学教育学部特設音楽科卒業。
黒岩典枝、野崎幹子、中村義春、阿部容子、故 木下武久の諸氏に師事。
1978年ウィーン国際音楽ゼミナール夏期講習会にて声楽をH.レッセル-マイダンに、ドイツ歌曲をE.ウェルバに師事。
1984年、1990年ジョイントリサイタル開催。オペラでは「フィガロの結婚」の花嫁、バルバリーナ役に、「海へ乗り行く者たち」のキャスリン役に出演。
現在　中国二期会準会員
　　ボーカルグループ黒つぐみ会員



僧侶

長船　伸夫

国立音楽大学大学院オペラ科修了
植木桂、布施隆治、平野忠彦の各氏に師事。
1984香川に帰り地元での演奏活動を始める。
主な出演
オペラ…「泥棒とオールドミス」（ボブ）、「ドン・ジョヴァンニ」（レポレッロ）、「魔笛」（ザラストロ）、「夕鶴」（そうど）、広島：「フィガロの結婚」（バルトロ）、「カルメン」（エスカミーリョ）、岡山：「ワカヒメ」（苑臣）、「那須与一」（岩獄丸の怨霊・源頼朝）など。
合唱曲のソロ…シューベルト「ミサ」、ハイドン「ネルソン・ミサ」、広島：ベルディ「レクイエム」・サンサーンス「レクイエム」、広島・福山：モーツァルト「レクイエム」、ベートーヴェン「第九」など。
1989には「グループアーティスト21」を結成し、観音寺と高松において毎年２回のコンサートを開いている。その他、県内において各種コンサートに多数出演している。
現在　香川県立香川西部養護学校教諭　グループアーティスト21会員
　　二期会四国支部会員



山鳥居

秋山　　啓

島根大学教育学部特設音楽課程声楽専攻卒業。同専攻科修了。
森山俊雄、吉田功、黒岩悟、故 木下武久の諸氏に師事。ジョイントリサイタル２回開催。1978年～岡山市民合唱団“鷺羽”毎年の定期演奏会にてミサ曲等のソロを務める。'91年５月“鷺羽”カーネギーホール演奏旅行の際、サンノゼ教会大聖堂にてモーツァルト作曲レクイエムのソロを好演。1979年～中国二期会にてモーツァルトの「魔笛」でパパゲーノ役をはじめ、毎年数々のオペラ公演に出演。
現在　岡山女子短期大学助教授
　　中国二期会会員
　　ボーカルグループ黒つぐみ
　　岡山バッハカンタータ協会員
　　岡山市民合唱団“鷺羽”ボイストレーナー

神官

柳井　博文

洗足学園大学音楽学部音楽科声楽を卒業。
卒業後はフリーで音楽活動を行なう。帰福後、教鞭を執るかたわら、リサイタル・ソリスト等、音楽活動を重ねている。
声楽を島田恒輔、松西正秀、田原祥一郎の各氏に師事。
現在　広島県立三原東高等学校教諭

母
掛谷　佳子

叔母
谷中加代子

薬師手(叔父)
川西　　顕

徒妹
橋本　　史

役人
広江　正教

舞妓
金光　直子

舞妓
清水　明美

舞妓
清水　澄代

舞妓
鈴木　恒美

舞妓
高橋　美紀

舞妓
土井　範江

舞妓
富山　育美

舞妓
成本　直美

舞妓
原　久美子

舞妓
廣嶋　晶子

舞妓
深坂友美子

舞妓
藤井　久子

舞妓
矢羽々由佳

親戚
池田　進一

親戚
石山　　登

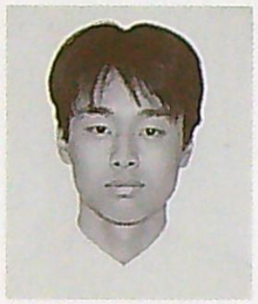
親戚・長持担ぎ
河野　道之

親戚
斉藤　　仁

親戚
佐方　　光

親戚
本多　正夫

日出吉・車夫
三甲野和史



香助・書生
土屋　正義

水兵
佐々木智彦

水兵
永滝　史明

巫女
三宅　由里

憂(子役)
井上　和美

稽古ピアニスト
来山　千晴

稽古ピアニスト
福川　澄江

稽古ピアニスト・巫女
小畠　和子

稽古ピアニスト
小林　則子

アンダースタディー

シャープレス……川西　　顕
ケート……清水　明美

演出部スタッフ

伊藤　浩子
大山　佐代

倉敷管弦楽団

「美しい音色と良いアンサンブルで質の高い演奏を」を合言葉に昭和49年設立の倉敷管弦楽団は、文化都市倉敷にふさわしい若さと熱気に満ちた楽団です。バロックから現代曲までの幅広い演奏活動で昭和57年には岡山県文化功労賞、昭和60年には倉敷文化連盟賞を受賞し、将来を大きく期待されています。

定期演奏会では早川正昭氏、フォルカー・レニッケ氏、堤俊作氏、古谷誠一氏、湯浅卓雄氏、金洪才氏、佐渡裕氏、星出豊氏、田中一嘉氏、田中良和氏ら各地で活躍中の指揮者を客演指揮者として招き、またフルートの世界的巨匠ジャン・ピエール・ランパル氏との共演をはじめ、ヴァイオリンの和波孝禧氏、前橋汀子氏、豊田弓乃氏、景山誠治氏、ピアノの深沢亮子氏、伊藤恵氏、チェロの岩崎洸氏、安田謙一郎氏、山崎伸子氏、オーボエのディーテルム・ヨーナス氏、トランペットの津堅直弘氏、又岡山県内で活躍中の音楽家達との共演や、團伊玖磨氏作曲の「管弦楽のための高梁川」の初演、創立10周年記念の400名から成る第九演奏会、中国二期会とのモーツァルトのオペラ「魔笛」、「フィガロの結婚」、「コシ・ファン・トゥッテ」、ビゼーのオペラ「カルメン」、J.シュトラウスの「こうもり」、フンパーディンクのオペラ「ヘンゼルとグレーテル」の演奏、また、瀬戸大橋開通を記念して、小六禮次郎氏作曲の交響詩「瀬戸内讃歌」の発表。15周年を記念して「三枝成彰 with 倉敷管弦楽団スーパードリーム・ジョイントコンサート」を行ない本年度、倉敷音楽祭の前夜祭でミュージカル「11匹のネコ」の大成功をおさめるなど多彩な演奏活動を続けています。

オペラ「蝶々夫人」出演者

倉敷管弦楽団

■第1ヴァイオリン
岡崎良弘
飽浦良和
阿曽沼和代
稲田真理
菊池東
木村啓子
陶山容良
樽谷美幸
山名良

■第2ヴァイオリン
園田哲郎
有田和恵
栢野真由美
越宗宣子
真田奈美
中川貞子
平井文子

■ヴィオラ
黒住彰夫
久磨晶子
武本克己
中野隆重
新見由枝

■第2チェロ
松江雄二
石川恵子
黒田正典
田辺幹夫
光延勢吾

■コントラバス
本屋敷勝信
難波由宏
山口里志

■フルート
片山知子
坂井昌子
藤沢桂子

■オーボエ
吉田容子
塚原美佳
本屋敷由起子

■クラリネット
児玉史子
松本美和子

■ファゴット
西倫世
藤原恵一

■ホルン
板谷信昭
小山紀幸
西崎大修
佐藤量太郎

■トランペット
原田宗範
山口裕司

■トロンボーン
佐藤俊昭
平石一夫
光井伸行

■打楽器
平川敬介
細美聖
福岡信夫
吉田徹

協　賛　企　業

スポンサー

荒木医院
福山市笠岡町1-31

井原精機㈱
笠岡市茂平1234 本社第２工場　井原市上出部町431-3

エフビック㈱
福山市三吉町5-1-45

昭和ゼネコン㈱
福山市大門町野々浜1428-1

医療法人賢仁会松岡病院
福山市宝町5-32

㈲森近石材
沼隈郡沼隈町草深2564-2

山脇酸素㈱
尾道市山波町3038-3

吉元建設㈱
福山市駅家町倉光596-2

パトロン

㈲曙高橋酒店
福山市新涯町1-30-2

大畠まり子
尾道市向東1370-1

キングパーツ㈱
福山市御幸町大字下岩成879-1

西谷内科
福山市本町5-20

㈱丸忠建設
福山市駅家町向永谷1509

パートナー

公認会計士税理士　相原一保
ガラス工業　相原恵子
㈱アクトシステムズ
青山商事㈱「洋服の青山」
青山興産
青山物産
青葉出版㈱
赤新工業㈱
朝日生命保険相互会社福山支社
旭調温工業㈱
アサヒタクシー㈱
㈱アンフィニ広島
ウインク㈱
ウエスギ㈱
栄工社㈱
江草メリヤス
㈱エフピコ
㈲エム・デイ・エス
オタフクソース㈱
㈱大昌工芸
大山正男
勧角証券㈱岡山支店
㈱近畿日本ツーリスト福山支店
㈱キング食品
クラハシ㈱
㈱桑宗
桑田㈱
㈱ケンスイ
㈱公善社
光和物産㈱
国際証券㈱福山支店
小林繊商㈱
榊原商店
山陽電気工業㈱
山陽土建工業㈱
山陽染工㈱
三洋電機中国特機㈱
三和製作㈱
三和エンジニアリング㈱
㈱サンエス
商工中金福山支店
新日本証券㈱尾道支店
スガナミ楽器店
㈱鈴木工務店
住友信託銀行福山支店
住友生命福山支社
セイコウ㈱
㈱せとうち銀行福山支店
竹野木材㈱
㈱第一勧業銀行福山支店
第一生命福山支社
大和証券㈱福山支店
大和建設㈱
㈱大和広告
㈱中国銀行福山支店
㈱中国新聞サービスセンター
㈱中国宅建
テラルキョクトウ㈱
㈱寺岡精工福山営業所
㈱電通広島支社
㈱天満屋福山店
東邦生命保険相互会社福山営業所
東洋火災海上保険㈱福山営業所
東洋証券㈱福山支店
㈲朋ファーマシー
鞆鉄道㈱
鞆信用金庫
豊田水産加工㈱
日東製網㈱
ＮＫＫ福山製鉄所
㈱日本交通公社福山支店
日本生命保険相互会社福山支社
日本ホイスト㈱
野村証券㈱福山支店
法宗医院
㈱ハクスイ
㈱博報堂広島支社
浜田富雄税理士事務所
㈱ハヤシ
ハヤシ商店㈱
㈱ビッグジャガード
広島化成㈱
㈱広島銀行福山支店
㈱広島総合銀行福山支店
備後通運㈱
藤井商事㈱
㈱富士銀行福山支店
㈱扶桑商会
藤本興業㈲
㈱コンサルタント・フカサカ
福山通運㈱
福山信用金庫
福山瓦斯㈱
㈱福山そごう
福山交通㈱
福山ニューキャッスルホテル
福山梱包工業㈱
福山暁の星高等学校同窓会
文化印刷㈱福山営業所
平和地下開発㈱
㈱ベルファニー
㈱豊栄
ホーコス㈱
マナック㈱
マツダ㈱福山事務所
マイフーズ㈱
㈱マルヤマ
マイカルグループ
　㈱ニチイ
マイカルグループ
　㈱ジャパンメンテナンス
マイカルグループ
　㈱ビブロス
ミムラ時計店㈱
三島産業㈱
㈱三菱銀行福山支店
明治生命保険相互会社福山支社
明和産業㈱
山一證券㈱福山支店
㈱吉本組
両備信用組合
和光証券㈱福山支店
和田㈱
（順不同）

サブパートナー

㈱アド・クリエート
神原病院
㈱キンスイ・インターナショナルリゾート
医療法人社団雄知会　古庵整形外科医院
小林建設㈱
五敬工業㈱
セイコウ㈱
全種類食品総卸問屋㈱高橋
谷口工業㈱
富田　明美
福山技研工業㈱
福山混声合唱団
福山ドレスメーカー専門学校
藤原小児科
㈱吉田本店

協力メンバー

井口　孝伸
一栄電気工事店㈲
インテリア和興
大江被服㈱
㈲大宏水道
門久建設㈱
金光燃料㈲
草浦　　孝
重政　俊之
竹丸　英夫
千々木雅彦
㈲中村金襴工場
藤原被服㈱
マルフク㈱
三甲野石油㈱
㈲室内装飾光成
三原石油㈱
㈲やまだ組
山本マイカーセンター㈱
㈱ワカバ

サブメンバー

青木　寿明
五百旗頭美由紀
植木　妙子
馬屋原病院
エビス不動産㈲
医療法人社団　奥野皮膚科医院
カワイ福山ピアノセンター
㈱神辺相互家具センター
菊地　直樹
㈱小林昇商店
さいとう小児科
桜ヶ丘ＰＴＡコーラス
㈲佐藤漆器仏具店
㈱三和酒店
神宮閣㈱
健照会　セオ病院
妹尾　　隆
高橋　行雄
竹本　順子
田中　英雄
出原　　勉
南坊井上内科循環器科医院
㈲ビューティかわむら
平井　元子
㈱福山ガスショップ
福山仁風荘病院
藤井　忠道
堀石　定子
三宅金属㈱
村上　国男
㈱薮田商店
吉見真理子

他、匿名２名

蝶々夫人・福山公演実行委員会

実行委員長	鍋島喜八郎	委　員	綾　芳一
副実行委員長	上杉　博美	〃	斎藤　仁
〃	倉橋　吉敬	〃	林　忠敬
〃	鈴木　康平	〃	日高　好一
監　事	佐藤　靖雄	〃	森近　功子
〃	荒木　英斎	〃	森山　勝利
		事務局	日高　京子

芸術文化振興基金助成事業